

## A 6 海域（有明海諫早湾）の問題点と原因・要因の整理

## 1 この海域の特性

A 6 海域(諫早湾)は図 1 に示すように、有明海の中央に位置する支湾である。また、環境省 有明海・八代海総合調査評価委員会(平成 18 年 12 月)委員会報告によると A 6 海域前面では恒流としては島原半島側の南下流が明瞭で、有明海全体として反時計回りの恒流が推察されている。

水塊構造は、気象条件によって大きく左右されるが、基本的には夏季に密度成層が発達する、と考えられる。また、底質は泥質である。2003 年以降は粘土・シルト分、有機物及び硫化物に増加傾向はみられない。

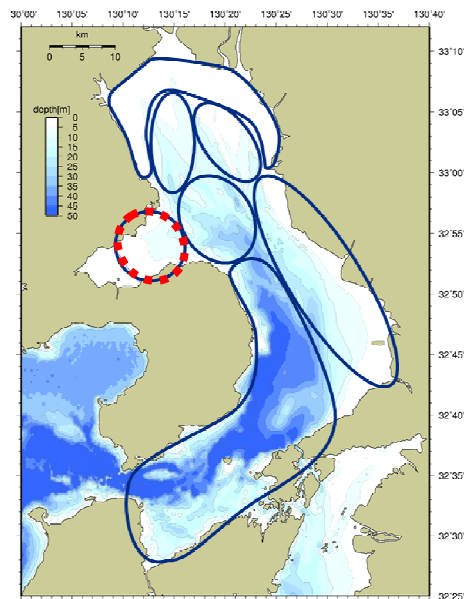
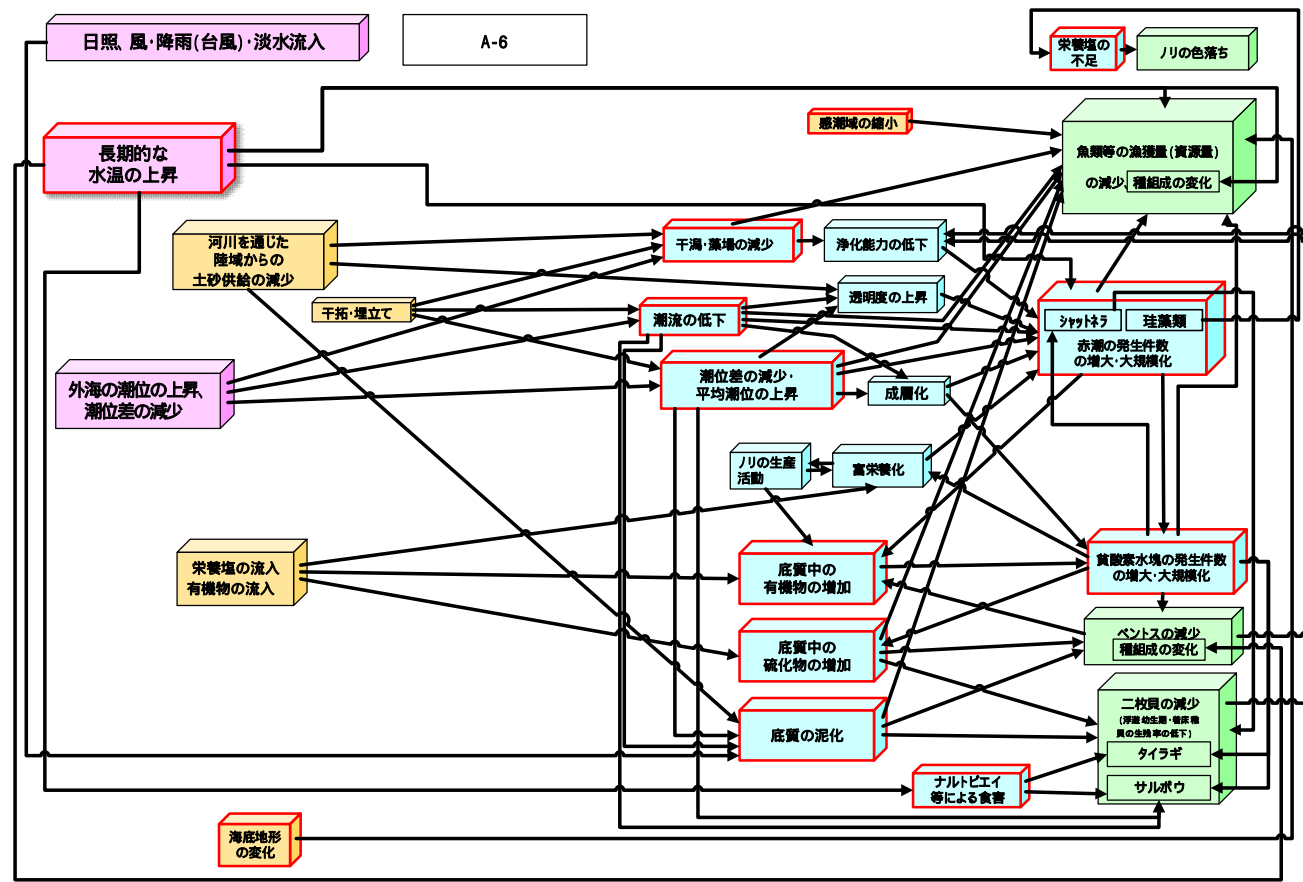


図 1 A 6 海域位置

当該海域の問題点とその原因・要因に関する調査研究結果、文献、報告等を整理し、問題点及び問題点に関連する可能性が指摘されている要因を図 2 に示す。



: 直接的な原因・要因
  : 生物、水産資源
  : 海域環境
  : 陸域・河川の影響
  : 気象、海象の影響

図中、枠内の語尾に を付した原因・要因は当該海域への影響が他海域を経由するものを示す。

図2 A 6 海域(諫早湾)における問題点と原因・要因との関連の可能性

## 【ベントスの減少】

## 2 ベントスの減少

## 現状と問題点の特定

A 6 海域では、1970 年からのベントスのモニタリング結果がないため、ここでは 2005 年以降のモニタリング結果を確認した。図 4 に示すように、2005 年以降、種類数・個体数ともに明瞭な増減傾向はみられなかった。主要種も大きな変化はみられなかった。

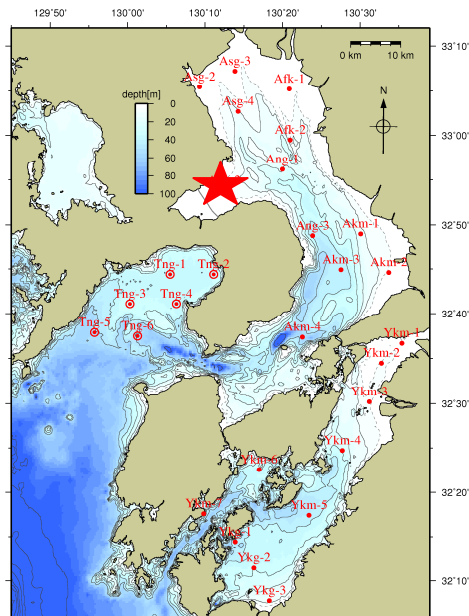


図3 A 6 海域におけるベントス調査地点

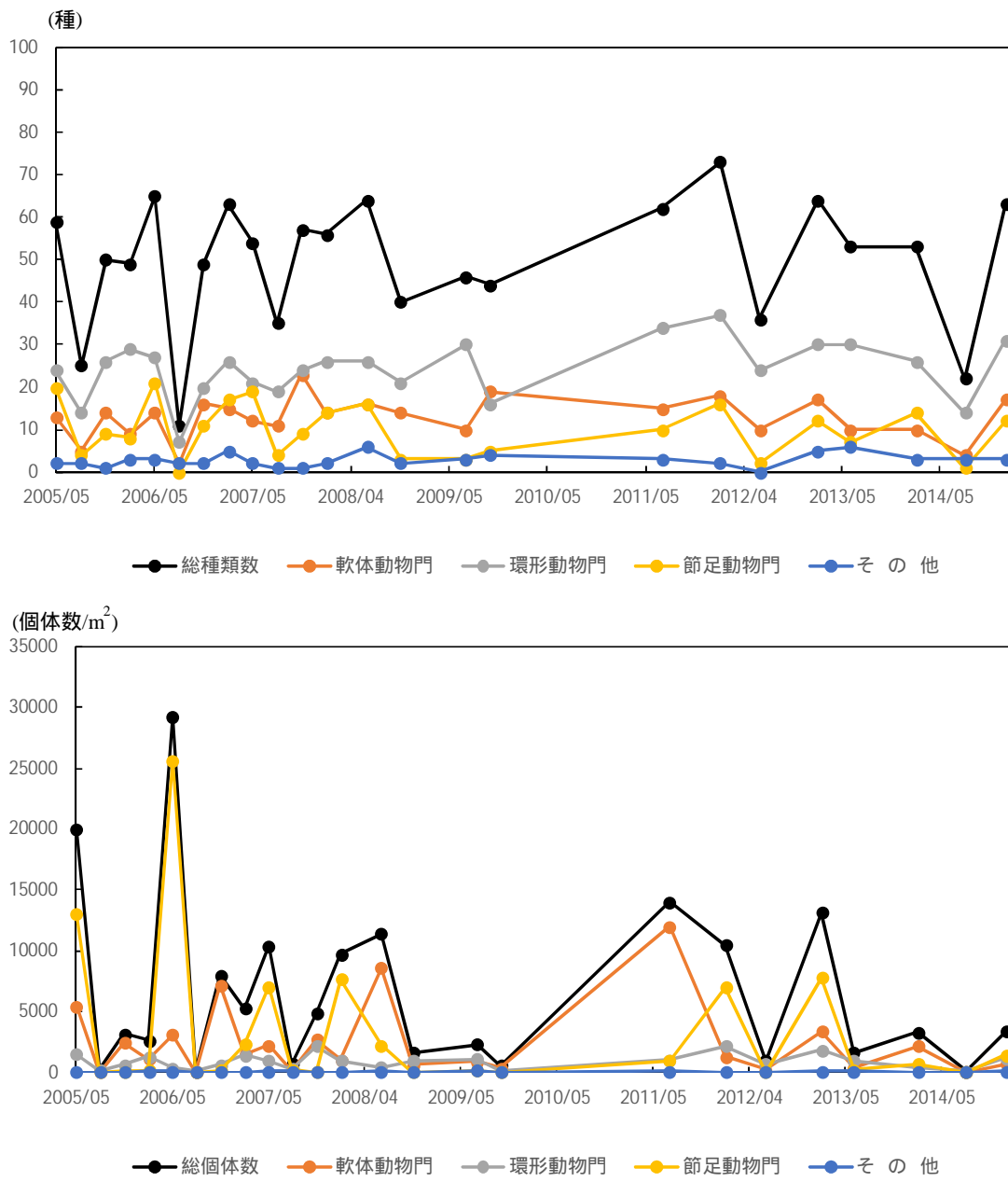


図4 A 6 海域におけるベントスの推移

表1 A 6 海域におけるベントスの出現主要種の推移

A-6		
Ang-2		
2005/05	節足動物門	Corophium sp.
	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
2005/08	軟体動物門	ヒメカノアサリ
	環形動物門	Sigambra tentaculata
2005/11	環形動物門	Cabira pilargiformis japonica
	軟体動物門 二枚貝類	ヒメカノアサリ
2006/02	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	軟体動物門 二枚貝類	ヒメカノアサリ
2006/05	環形動物門	Paraprionospio sp.(B型)
	節足動物門	Prionospio sp.
2006/08	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	軟体動物門	ホソヨコヒ
2006/11	環形動物門	Sigambra tentaculata
	軟体動物門 二枚貝類	ヒメカノアサリ
2007/02	環形動物門	イトエラスビオ
	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
2007/05	軟体動物門	クビナカガメ
	節足動物門	ホドトリア科
2007/08	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	環形動物門	Sigambra tentaculata
2007/11	節足動物門	ホドトリア科
	軟体動物門	カイクシ目
2008/02	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	環形動物門	Rhynchospio sp.
2008/07	環形動物門	イトエラスビオ
	節足動物門	Corophium sp.
2008/11	軟体動物門 二枚貝類	ヒメカノアサリ
	軟体動物門	シズクガイ
2009/07	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	軟体動物門	カイクシ目
2009/10	軟体動物門	リツホ科
	環形動物門	イトエラスビオ
2011/07	軟体動物門 二枚貝類	ヒメカノアサリ
	環形動物門	Sigambra tentaculata
2012/02	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	軟体動物門	イトエラスビオ
2012/07	軟体動物門	Sigambra tentaculata
	環形動物門	Lumbrineris longifolia
2013/02	軟体動物門 二枚貝類	シズクガイ
	軟体動物門	ヒメカノアサリ

## 【採取方法】

スミスマッキンタイヤ型採泥器にて10回採泥

## 【主要種の選定方法】

年ごとに、Ang-2 において個体数が多い順に3種抽出した。

## 【出典】

H17～H25 環境省調査結果より取りまとめ

A 6 海域における出現主要種の変遷を詳細にみると、2005 年から 2013 年まで、主要種は継続的に節足動物、軟体動物（二枚貝類）及び環形動物で構成されており、大きな変化はみられない。

シズクガイ、チヨノハナガイ、ヒメカノアサリなど内湾泥底種が優占している。

### 要因の考察

底質の泥化については、細粒化の観点から整理を行うこととした。1970年頃からの底質のモニタリング結果がないため、ここでは2001年以降の調査結果から要因の考察を行うこととした。図5に示すように、粘土シルト分に一様な増加・減少傾向はみられず、2001年以降、泥化傾向はみられないと考えられる。COD、強熱減量、硫化物についても一様な増加・減少傾向はみられなかった。

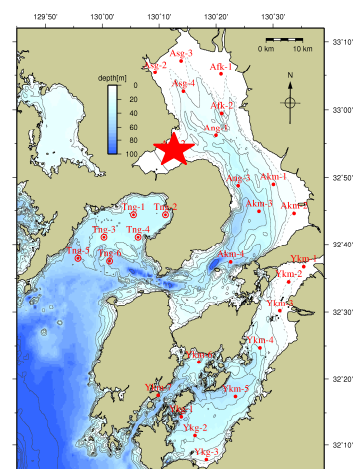
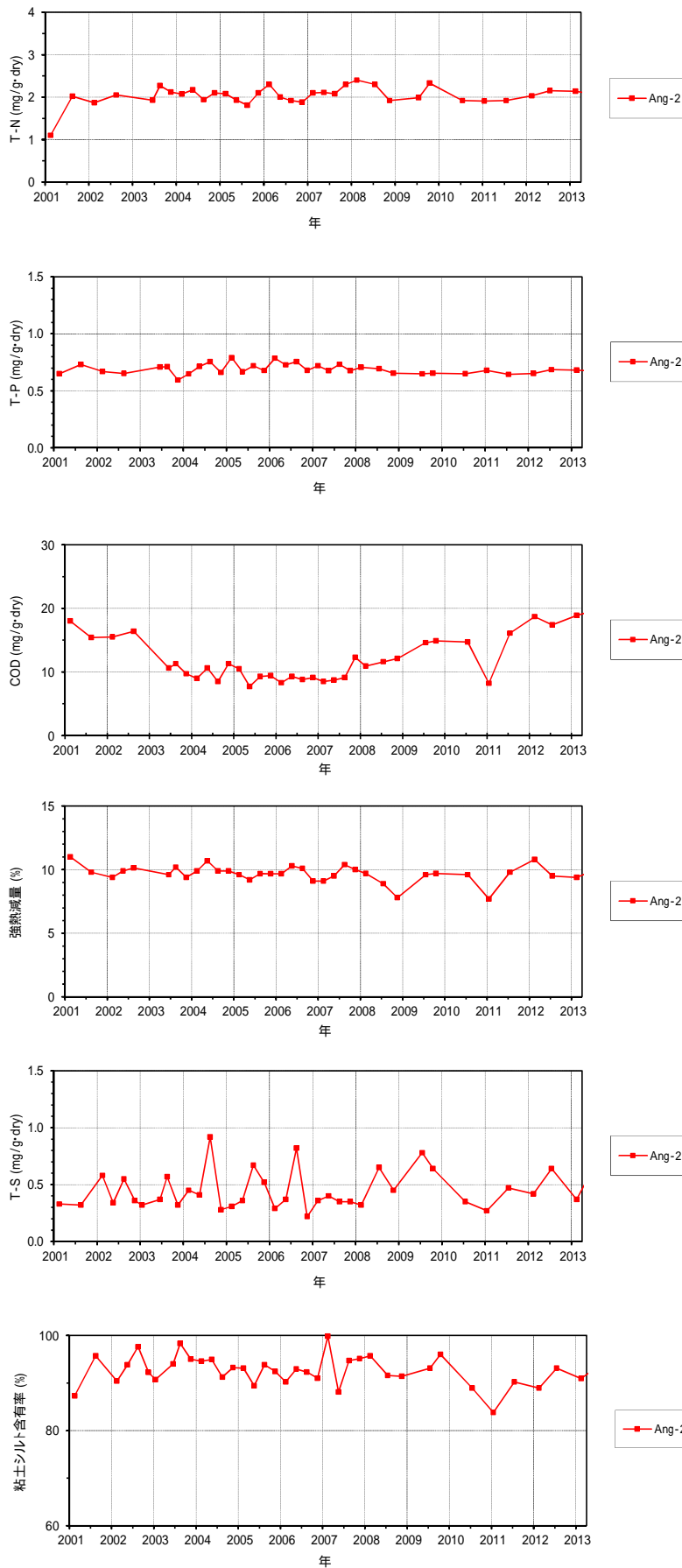


図5 A 6 海域における底質の推移  
(図3 A 6 海域におけるベントス調査地点と同一地点)

《まとめ》

ベントス調査結果については、2004年以前のデータがない。

調査結果データがある期間においては、A 6 海域では、2005 年以降、種類数・個体数ともに明瞭な増減傾向はみられなかった。

底質の調査結果については、2000年以前のデータがない。

調査結果データがある2001年から2013年においては、泥化傾向はみられず、COD、強熱減量、硫化物についても一様な増加・減少傾向はみられなかった。